

令和7年度第1回下田市総合教育会議 会議録

開催日時： 令和7年9月30日（火）16時00分～17時03分

場 所： 下田市立中央公民館 大会議室

出席者：

【委員】

市長	松木 正一郎	教育長	山田 貞己
教育委員	宮川 大輝	教育委員	宮内 慎也
教育委員	西川 紀栄	教育委員	佐藤 知佐子

【事務局】

学校教育課			
課長	平川 博巳	参事	宇仁 猛
学校教育係長	稲葉 元紀	こども育成係長	渡邊 貴裕
教諭	田村 明日美		
生涯学習課			
課長	増山 順一郎	社会教育係長	坂部 琢
		図書係長	鳥澤 早斗子
企画課			
課長	平井 孝一	企画調整係長	鈴木 浩之
主事	藤原 佑紀子		

傍聴者： 報道関係4名

1 開会 16:00

2 あいさつ

・市長

お忙しい中お集まりいただきありがとうございます。現在、国際情勢がいろいろと不安定になっており、私たちが今やっているグローバルな教育というものが重要性を増している。今年度は教育大綱の策定という教育施策としては節目の重要な年になるので、皆さんのお知恵、お力をぜひとも頂戴したい。

新しい朝ドラは、ラフカディオ・ハーンと小泉セツのお話であるが、日本は明治維新以降に近代化を急ぎ、その中で失われていくいろいろなものに対して、ハーンはとても残念だというメッセージを突き付けている。地域の歴史や文化などのローカリズムから他者への敬意に繋がり、あるいは異なる文化に対する理解に繋がる。つまりグローバルとローカルは背中合わせである。そういう教育から現在の環境問題、あるいはウクライナやガザ地区などに対しても子どもたちがしっかりと目を向けてくれるようになるのではないかと思います。これが私たちが今やっているグローバルCITYプロジェクトの教育分野として重要な基底を成している。これから皆さんのお力をお借りしながら、そういう視点を持った子どもに育つように教育大綱に力を入れていきたい。

・教育長

秋の装いに移っていく中で、校外引率届や校外行事関係の届が教育委員会に毎日のように届いている。それだけ秋は子どもたちの屋外活動が盛んに行われている。

グローバルなことは一段落している感じで、今はローカルに関した子どもたちの活動が非常に多くなってきている。報道でも子どもたちの様子を上手く映してくださり、小中学校の活動の様子が市民に伝わっていると思う。

令和3年度から7年度までの教育大綱が一度区切りをつけ、令和8年度から5年間の教育大綱を策定する。これまでの5年間で社会情勢も教育界もだいぶ変わった。これからの5年間は、また大きく変わると思われることから、その流れに負けないような教育大綱を作らなければいけないと思う。素案の素案という段階だが、皆さんから忌憚のないご意見をいただき、これから未来を背負っていく子どもたちのための大綱にして参りたい。

3 報告事項

(1)市内小中学校の状況について【報告】

・事務局（学校教育課参事）より資料1・2に基づき報告。

【質疑、意見等】

・宮川委員

自然体験に関して、今教えてくださっている方たちをはじめ、自分が生活する為に学んできたことや体験してきたことを教えてくださる方は70代80代が多い。その次の世代は私たちであるが、そういう経験がないので教えることが出来るのは今教えている世代が最後かなと思う。そう考えると、他の地域の子どもたちにも同じことを体験させたいならば、進んで学ぶ最後の機会と思っている。学ばせたい思いがあれば、今教えてくださる方たちに相談しても良いと思う。

・教育長

中学校統合時に、中学校のあった4つの地域はそれぞれ、海に接したり、川の近辺であることから、今度は稲梓で体験できた事が出来なくなるのではないかと、あるいは稲梓の子どもたちがしてきたことを海辺の子どもたちにも体験させるとか、何かできないかという思いがあった。稲梓地区での鰻のもじり体験では、教えに来てくださった方の中にも、もじりはしたことが無いと言う方もいて、子どもたちの為に一緒に学びながらやろうという姿は終わりのなのだなと思った。もじりを吉佐美の子どもたちに味あわせることも大いにありだと思う。また、山の子どもたちが海のカニ引きを教えてもらうとか、そういう交流があれば良いと思う。

また、教文会の後継者には、稲梓に限らず他地域にも学ぶ気持ちのある若者がいる。教文会に学ぼうというのは面白い。

・学校教育課参事

宮川委員が先ほどおっしゃられたように、地域を超えた教育体験や交流活動などを増やしたいという意見はいろいろなところから頂いている。積極的に考えていきたい。

・市長

いじめや不登校の原因はいろいろあると思うが、コロナ禍で黙食をしたのが要因ではないか。市職員も同じテーブルを囲んで食べていても全員黙ってスマホをいじっていて、コミュニケーションが不足していると感じる。もしかしたら子どもたちも黙食の習慣が染み

付いていないか心配である。学校現場はどうか。

・学校教育課参事

コロナ禍は、みんな前を向いて一言も喋らずに、小学校も中学校もルールを守って食べていた。コロナ禍が明けてからは特にそのような様子もなく、普通に班にして今まで通りの食べ方をしている。授業も協働的な学びをととても大事にしている。様々な行事や体験活動を各学校が意図的に組み込んでいるので、子どもたちの関わりが疎遠になっているという印象は小中学校見ていると特にない状況である。

・教育長

そういう様子はなく、名残りもない。

・佐藤委員

コロナ禍が明けてから、子どもたちは今までと同じように給食を楽しみながら会話をして楽しんでいる。

・教育長

マスクはコロナ前よりも多少増えた。少し風邪気味だとか自分を守る意味でする子は若干いる。大人も同じ。変わりなく賑やかで、学校生活は送れるようになっている。

・市長

私が気掛かりなのは、マスクをして、あまり会話をしようとしないう市職員で、割と、聞くとか頼るとか教えてほしいという感じにならず、抱え込んでいるのではないかと心配している。失敗しても構わないし、分からないことは聞いて良いんだと背中を叩いて言うが、あまり強く言うと無理やりになってしまうので、気をつけながら声をかけている。大人でさえそういう状況なので、もしかしたら同じような子どもがいるのではないかと。学校教育課内部で把握していれば教えてほしい。

・教育長

不登校の要因は、コロナ前と今とそれほど変わらない気がする。確かにコロナでコミュニケーションができないことから、1人でゲームやスマホをいじるということになっていた。今は小学生でもスマホを持っていて、友達と集まってもスマホを触って会話がないう。そういう時代になってしまっているのは心配される。

・宮内委員

いじめといたずらの境界線に線引きはあるのか。例えば、いたずらだったら、座るときに椅子を引いたり上履きを隠したりとか、そういうこともいじめの認知に当たるのか。それが継続して1週間や1か月続いたら、いじめとなるのか。その辺を聞いてみたい。

・学校教育課参事

本当にその子が嫌だと思っただけで、いじめになる。例えばそのことを日記に書いて、先生が子どもの嫌な気持ちを確認したら認知となる。

・教育長

いじめといたずらとどう違うのか、また、喧嘩といじめとどう違うかがある。いじめの定義も変わってきていて、当初は何日間か長期的に嫌なことをしている期間が続いたら等

あったが、今は嫌だと思ったら、という定義に変わってきてるので件数も当然増える。それは一番近くにいる担任の先生や学校の関係者がどう見るか、どう判断するか、どう捉えるかになると思う。本当に些細なことも取り上げていかないと大きなことに繋がっていくので、そういった意味では学校は緊張感がある。

(3) 下田市教育大綱（案）について

・事務局（学校教育課参事）より資料3・4・5・6に基づき報告。

【質疑、意見等】

・佐藤委員

学習指導要領の改定によって今までの知識ということよりも、自分の好きなものを伸ばしてもらい、得意なことが堂々と人前って言えて、それが人の役に立つということが自信になっていけるような子どもたちに育ってもらいたい。教科書を読んで、それを覚えるよりも、これからは自分の力として発揮できる子どもたちになってもらいたい。教育理念の「未来を創る人」はとても良いと思う。

・教育長

「未来を創る」は下田中学校の校訓。下田の子どもたちが未来を創るという、小学校における校訓と考えても良いと思う。

・市長

前回の案では、下田に誇りをとっていたが、今回の案では、下田への誇りはあえて除き、志を高くすることと未来を創るということで、誇りを持つという言葉が無くなったと感じた。除いた分、新しい概念を加えるならば、単なる知識をつけるのではなく、その知識でいかに社会に貢献できるか、算数の問題を解くよりもガザ地区の現状を見て心を痛めなければならない。今の子どもは戦争がない平和な日本しか知らず、平和の尊さに対する認識が十分じゃない。もっと広い視野を持ち、やがて社会で何らかのプラスになることをして、やっとそれで一人前なのだ、といったメッセージをどこかに入れられないか。

・西川委員

子どもを育てる一母親として、小さな頃からゲームやパソコンに触れたりすることで、あまり外に出たい気持ちがないというか、外に出るよりも出る手前の楽しさを優先するところがある。私自身に置き換えると、小さい頃は走り回ったり、鮎やおたまじゃくしを取っていたが今の子どもたちはそういう経験をしていない。

私が楽しかったと言っても、同じような経験をしたいと思っていないし、これから先も、興味がなければしないのだろうと思っている。些細なことだが、宮川委員の言うように何かを経験するというのは、学校で強制的にやれば必ずみんなで経験ができる。もちろん親がやれば良いが、共働きの家庭が多い中で、なかなか細かな経験をさせてあげる時間がない。いろいろな経験をさせて大人になってもらえたら、視野が広がり様々な事に興味を持ち、自分の仕事とかにも発展していく子が出てくるかもしれないと思い、経験は大事なのではないかなと思っている。

・学校教育課参事

子どもが少なくなっているので、以前より様々な体験活動を実施しやすい環境にあると思うので、ぜひ進めていきたい。

・宮内委員

土地によって様々な文化伝統があって、それを継承させていくのは大事だと思うが、小学校の児童にすぐやれというのは無理な話なので、宮川委員のおっしゃったように、それらを教える方々に協力してもらい、動画を撮らせていただき、実体験の記録を小学校の財産として残すことで、昔こういうことをしていたということを教えるのも大切なのではないか。それを子どもが見た時に、その子の親も自分がやっていた経験を自ら教えようという可能性が出てくると思う。後世に残すという意味で動画等、形として残す必要があると思う。

・宮川委員

本来は地域や家で教わるようなことを学校で教えなければならず、学校の先生は大変だなと思うが、そういう時代なのかなとも思う。

教育理念の4つの取組はそれぞれ全部絡んでいてどれも欠かせない、人生を豊かにして人間性を寛容するということなので、4つの取組があって1つにまとまりになるのは良いことだと思う。

キャッチフレーズの「開国のまちから未来へ」は、子どもたちが下田から外に出て行くのではなく、下田から未来を築く子どもたちを育てるという意味の大綱になっているので的を得ている。

・教育長

おそらく皆さんが描いているものは、ほぼ共通してると思う。

今、認知能力という言葉に代わり、非認知能力という言葉が出始めている。要するに、知識とかではなく、本当に感覚的な能力ということ。それはとても大事だと思っていて、知識ももちろん大事だが、その知識を蓄えるためには非認知能力も十分ないと器も小さくなってしまう。ただ、その非認知能力という言葉がこれから出回るにしても、この言葉を大綱に入れると硬くなるので、上手に散りばめながら作っている。誇りという言葉はないが、郷土愛という言葉はあるし、確かな感性を多くの体験の中で培っていく、この基本的な道筋があれば良いと思っている。順番付けしているが、大事な順ということでもなく、体は大事ということで参事と話をした中で、心身の育成、学力、下田で目玉にしている体験活動や探求活動等、それから国際交流、そういうことも基盤としては大事ということで最後にこの4つとなった。これを市民の皆さんに伝える時に、どういう形が見やすく伝わるか、いただいた意見も加えて組み替えていく必要がある。あとは記述やレイアウト、デザインについてはそれから改めて工夫できるところもあると思っている。皆さんの意見を聞いて少しホッとしたところもある。方向性が見えてきた。

・学校教育課参事

必要のご意見をたくさん、ありがとうございます。作成に向けた今後のスケジュールについては、ご覧のとおりとなっております。本日、ご協議いただいたことをもとに再検討作成させていただき、このあと、校長会や未来の下田創造プロジェクト会議や市民の意見をいただきながら、1月下旬に行われます第2回の総合教育会議には最終案として提示させていただきたい。その後3月に公表に向けて進めていきたいと思います。

・市長

1つ加えていただきたいことがある。先ほど、宮川委員から田舎の知恵の継承という話がありましたが、大人も教育されるべきではないでしょうか。

暮らしの学びが継承できるかどうかは今すごく危機的な状況にある。確かに最近の私た

ちは、ちょっと前の先輩方のような田舎の知恵をちゃんと受け継いでいない。大人も子どもと一緒に学ぼう、育っていこうということが、この中に少し入ってくると良いなと思った。市町村の教育というと小中学校の印象があるが、そこに大人も混ぜてしまうことはできないか。一緒に育とうという、そういう大人の姿勢があると、子どもたちが受け取ったときに一緒に頑張りましょうと言ってくれるのではないかと思う。

とても建設的な意見を皆さんからご提言いただきまして、ここに改めて感謝申し上げます。

4 閉会 17:03